錨のない船

下巻

加賀乙彦

講談社

錨(いかり)のない船(ふね)　下巻
一九八二年四月二十二日　第一刷発行

著者——加賀乙彦
© Otohiko Kaga 1982, Printed in Japan
発行者——三木　章
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二―三―二　郵便番号一二三　電話東京〇三―九四五―一二一一(大代表)　振替東京八―三九三〇
印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——株式会社堅省堂
定価——一六〇〇円
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-06-119382-1　(文1)

錨のない船　下巻＝目次

第五章　谺　5
第六章　悪魔のトリル　82
第七章　凍った池　178
第八章　マミー　289
あとがき　428
取材に協力していただいた方々　430
参照文献　431

装幀 司 修

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

錨のない船

下巻

第五章　研

1

ざわめきに睡りから覚めた。プラットホームに黒い喪服が犇めいていた。老人と婦人ばかりで、色の褪せた皺くちゃの喪服が多い。白い遺骨を首からさげた人々が汽車から降り立つたびに喪服の人々は頭を下げていた。遺骨には「故××上等兵之英霊」などと書いてある。胸に名札を縫いつけた学童たちが英霊とすれちがいながら歩いていく。羽生も目を覚した。山田は鼾の勢をすこしも衰えさせず寝込んでいる。

隣の三等車は超満員の気配だ。健たちが乗っている二等車は、通路に立つ人はいるにしてもそれ程ではない。国民服やモンペや軍服に混って白麻の背広や華やかなドレスもあり、避暑地へむ

かう列車の余裕を思わせる。ドアが開き、外国人の一団が入ってきた。引率の憲兵が見渡すが空席はない。外国人たちは、おそらく、着のみ着のままで来たらしく不断着にトランク一箇という人がほとんどで、疲れ切った顔付である。中の一人、老婦人が健に話しかけてきた。知らない言語である。健は頭を振った。

「ドイツ語じゃないかな。山田ならドイツ語が判るぞ」と羽生が山田を起そうとした。健は手で制し、英語で言った。

「アナタハどいつノ方デスカ」

「ノー」と老婦人は微笑し、英語に変った。一語一語をゆっくりと発音する、外国人の英語である。「私ハすぺいん人デス。アナタハドコノ国デスカ」

「ボクハ日本人デス」

「オウ」老婦人は健を半ば珍しげに、半ば驚きの面持で眺めた。日本人は、こういう率直な見方をせず、興味があるとかえって見て見ぬふりをするが、スペイン婦人は違っていて、健はかえってそれを快く思った。

「ボクハ混血児デス。トコロデアナタハドコカラ来タノデスカ」

「横浜デス。アソコデモウ二十年こるくト葡萄酒ノ貿易商ヲシテイマス。ソレガ急ニ軽井沢ニ移住セヨトイウ命令デビックリシマシタ。ワレワレ中立国ノ人間マデ強制移住サセル理由ハナイト抗議シタノデスガ、家ノ近クニ何カ秘密ノ要塞施設ガデキタトカデ、立退キヲ命ジラレマシタ」

スペイン婦人は振返り、夫らしい老人、孫でもあろうか十四、五の娘と十ぐらいの男の子を掌で示した。

「ソレハ大変デスネ。ココニオ坐リナサイ」と健は立った。羽生も立った。山田は寝惚け眼で訳が分らずに立った。

老夫妻と娘が坐った。もう一つの席にいた麻の背広の紳士は知らぬ顔で窓外の森や山を眺めていた。夫婦は男の子を自分たちの間に割り込ませた。

「こら」と憲兵が寄ってきた。上等兵だ。「グループを離れてはいかん。あそこに一塊になれ」

スペイン老人が片言の日本語で言った。

「わたしたち、逃げません。この汽車から、逃げません」

「いかん。あそこに集っとれと言ったはずだ」憲兵は、三人の将校の前で自分の権力を誇示するつもりか威丈高である。

「まあ、いいではないか」と健はおだやかに言った。「この人たちは疲れているんでしょう」

憲兵は、健の顔を訝しげに見上げ、

「あなたは……」と何か言いかけた。

「まあ」と山田が厚い肩で憲兵を押し除けた。「とにかく、老人子供はいたわらんといかん。武士道だ」

憲兵は、将校に対して強くも言えず、照れ隠しに、外国人たちに怒鳴った。

「こらあ、話をしたらいかんと言っとるだろうが」

外国人たちは、ぴたりと黙った。憲兵は健と山田にいまいましげな目付を向けた。

「ひとりで大勢を監視せにゃならんのであります。事故でもあったらこっちの責任だから」

スペイン人夫妻は憲兵に遠慮して席を立った。健は、軍服のポケットに手を突っこみ、携帯ラ

ジオのスイッチを入れた。度胆を抜かれた憲兵をよそに、健はスペイン人夫妻に目くばせして坐らせた。アナウンサーの、無機質に透る声が伝っていく。

「……サイパン島の忠勇義烈なるわが部隊は七月十六日までに全員玉砕したことは、さきの大本営発表にもあった通りであります。敵機動部隊は小癪にも七月二十一日、大宮島（グアム島）に、七月二十三日にはテニヤン島に上陸を開始し、わが部隊は目下全力をあげてこれらの敵と激戦中であります。ところで、これらマリアナ諸島を足掛りにして敵が帝都空襲を目途(もくと)していることは明かで、東部軍では帝都防衛のため、銃後国民の防空対策を強化するように要望しております。各家庭には非常食、飲料水、防火用砂、防火用水、火叩き等を常備するとともに……」

汽車は横川を出て急坂にかかった。数多いトンネルを出るたびに、陽光を透かす木々の緑が明るかった。

「……この六月北九州における敵大型機の来襲に際しても冷静沈着なる国民の防空活動の結果被害を僅少に止めえたのであります……」

健は時間表を見上げた。明日の朝までに審査部にもどるとすると、午前一時十七分発の汽車が最終だ。それが五時二十一分に上野に着く。

「これにしよう」と健は言った。「きょう一日を最大限に活用するにはこれしかない」

「しかし、もうすこし早く失礼したほうがいいのではないか」と羽生が山田と示し合せた。

「かまわないよ」健は断言した。「これでも早すぎると家のものが残念がるくらいだ」

この所休みが皆無の多忙な毎日が続いていたところ、昨日の夕方になってきょうの日曜日は休

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

めることになり、急遽軽井沢の来島邸訪問が決った。朝四時起きで審査部を出、上野発の一番に乗ってきたのだ。何度電話しても通ぜず、不意の来軽であった。明後火曜日には、来島と羽生は、新しく工場出の疾風を漢口の第二十二戦隊まで移送する任務が待っていて、明日の朝はその整備と準備のため是非とも帰隊せねばならない。

駅頭には、千人針を請う割烹着の国防婦人会や、リュックを背負った買出しの人たちがいたが、いかにも軽井沢らしく外国人が目立った。さっきのスペイン人親子を含む一隊が憲兵に引率されて駅前旅館の牡丹屋へ向っていた。見ると玄関先に「軽井沢憲兵隊分駐所」の新しい木札がさがっていた。

警察署の前では配給でもあるのか、外国人たち数十人が列を作って警官に指揮されていた。胸にナチスの鉤十字を縫いつけたドイツ人たちだ。

「これはまるで外国へ来たみたいだ」と羽生が言った。

「そうだろう。ここは外国人の強制居住地区になっているからな」と健は説明した。開戦直後、内務省令によって外国人の自由は大幅に制限され、住んでいる県よりほかの県に旅行するのに、一々知事や警察の許可がいるようになった。敵国英米人には厳重な監視がつき、軍関係者は俘虜として収容された。要塞地帯はもちろん、いくつかの府県では外国人の居住をみとめなかったが、最近になって、箱根と山中湖畔と軽井沢の三つが外国人居住地と定められ、そこへの強制移住が推進されるようになった。とくに昔から外国人の多く住んでいた軽井沢には、この強制移住で一層外国人が増え、現在四十箇国もの人々が集められていた。さらに最近、ここに別荘を持つ日本人の疎開も盛んになり人口の爆発的増加がおこっていた。

厩に馬の姿はなく、貸馬屋は廃業した様子だ。庭木を切りはらって畑にしている別荘が多く、大豆、小麦、玉蜀黍、馬鈴薯、茄子などが植えられていたが、火山灰の痩地とあって憐れな育ち方だった。

「ここも食糧が不足しているらしいな」と山田が言った。

「うん、すっかり見違えるな」健はあたりを珍しげに見回した。「去年の夏も来られなかったから、これでまる二年ぶりだ」

「まったくな」と山田は相槌を打った。「去年今年と疾風に追い回されていたからな」

懐しい白塗りの洋館が見えてきた。「あれだ」と健が指差すと、羽生と山田は急に、軍服の裾を引っぱったり、軍刀の帯の位置を直したりした。

玄関の格子戸を引いたが人の気配がない。健は庭先へ二人を案内した。ここも開墾され、トマトと里芋が、瀟洒なヴェランダや窓と不釣合な田舎風景を作っていた。弓音がした。畑のむこうの弓場(ゆば)では平三郎が和服姿で弓を引いていた。健たちに気付くとつがえかけた矢を弓手に持って来るのを待っている。

「急に休みがとれたんです。審査部の山田中尉と羽生中尉を紹介します」

「お初にお目にかかります」と二人は敬礼した。

「健の父です。お二人ともお名前はかねがね、うかがっています」

「恐縮であります」二人は固くなっていた。

「よく来てくださった。ゆっくりしてください。ボブ、マミーはナンシーとエルシーと教会だ。タキが残ってる。ま、どうぞ、丁度二束終ったところでね」

平三郎は先に立った。髪の毛は豊かだが白髪がめっきり増えた。大分痩せて肩が薄い。猫背気味に歩く様子が年寄じみていた。ヴェランダに一同がのぼると敷居口にタキが満面の笑みで健を包み込むように出てきた。

「まあ、ボブちゃま。よくいらっしゃいました」

健はタキに二人を紹介した。

「おれは教会へ母たちを迎えに行ってくるが、きさまら、どうする」

「そうだな」山田は羽生と顔を見合せたが、「ま、お掛けなさい」と平三郎に誘われ、羽生とともに籐椅子にかしこまった。

2

ヘンダーソン牧師の赤やいだ頬の皺を恵理は数えた。目の下から唇のところまで二十三本かしら。いや二十四本。でも、どうしてあんなに皺があるのかしらん。牧師は、見詰められて面映いのか恵理に頬笑み、恵理は頬笑み返し、天使のようなエルシー、ヘンダーソン牧師が頭を撫でたくなるようなエルシーを演じた。ヘンダーソン牧師は英語で聖書を読み続けている。一番後ろの席にいる警官に分るように、正しく発音し、ゆっくりと読むのだが、そうしてもむろん警官には分らない。けれどもそうしないと、警官はすぐ疑うのだ。警官が聞き咎めるのは peace という言葉だけで、これを聞いたら最後、反戦思想の宣伝だと勘繰り、いつかのように出席者全員が調

べられ証言がとられるので、そうならないよう peace だけは避けて、ヘンダーソン牧師は、ゆっくりと聖書を読む。でも、出席者には、白系ロシア人、イタリア人、スイス人などあまり英語の得意でない国の人が多いので、あんなにゆっくり読むということもあるのかしら。恵理は、前の席の白系ロシア人の広大な肩を眺め、いったい何インチ平方あるかを目測し始めた。脇腹をつつく者がいる。マギーが、キョロキョロしないで、朗読を聴きなさいと、睨んでいた。恵理はすこし首を垂れて聞き入った。

「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべしと云へることあるをなんぢらきけり。されどわれはなんぢらに告ぐ、なんぢらの仇を愛し、なんぢらを責むる者のために祈れ。これ天にいますなんぢらの父の子とならんためなり。天の父はその日を悪しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせたまふなり。なんぢらおのれを愛する者を愛すとも何のむくいをかうべき……」

誰かが扉を開いて入ってきた。式がほとんど終る頃に入ってくる頓馬さんは誰かしら、と恵理はそっと振返り、いきなり眩しい光を目に受けたように驚いた。軍服姿の健が立っている。教会に軍服で来るなんて、警察、憲兵が平和主義者の巣窟だと目をつけている教会なのに、健ときたら大胆、勇気ある。しかし危惧は俄然喜びに変った。ボブが帰ってきた。なんて素敵、本当に長い間会ってない、去年の春一家をあげて軽井沢に疎開してから会う機会がなくなった。恵理はマーガレットを突っつき、いたずらしないでよと睨む彼女に後ろを指差し、マギーが見る見る顔を赤らめるのが快かった。「ボブよ」「ええ」ヘンダーソン牧師が健を認めて驚きの表情（この牧師様心がすぐ顔に出る）となると、振向く人が出てきた。靴音高らかに健が入ってきた。嬉しい

わ。だけどどこに坐るのかしら。恵理は、マーガレットをぐっと押しやり、二人の間の隙間に健を差招いた。健が坐った。油と革の兵隊さんの匂いに健の香りが加わって、よい気持。聖歌が始まり、健が唱い、なめらかで豊かなバリトンが、恵理を包んだ。

小さな木造の教会から人々は林の中に、やわらかな涼風と小鳥の囀りのなかに、歩み出た。健がアリスと抱き合ったあとへ、恵理はその大きな胸に飛び込んだ。

「ボブ、よく来たわね。会いたかったわ」

「エルシー。元気そうだね」

「ねえねえ、いつまでいられるの。ずっといられるんでしょう」

「きょう一日だ。今夜は帰らなくちゃならない」

「たった一日！」ひどいわ。恵理は腹を立てた。軍隊はどうかしている。待ちこがれてやっと会えた兄に、たった一日しか会えないなんて！

健は安奈を抱擁し、マーガレットの両頰にも接吻した。マギーは、赤く火照って、目が燃えていた。何でしょう、あの優雅な身のこなし、さっきまで、まるで子供のように飛び跳ねていたくせに。蒔田和歌子が健に挨拶した。

健とアリスを囲みながら一同は坂道をおりていく。アリスは息子の腕をとり、溢れるようにしゃべり、鍔広の帽子が息子の顔を見るのに邪魔だと分るとかなぐり取って安奈に渡した。恵理はあわてて母の乱れた髪を撫でつけてあげた。

表を締め切った商店が多かったが、人出はあって、東京者らしい垢抜けた婦人やニッカーボッカーズの紳士が目についた。鳥打帽をかぶり黒眼鏡の青年が「やあ、健ちゃん、久し振りじゃな

いの」と声を掛けてきた。小山良一だった。
「良ちゃんか。変装が堂に入ってるんで見そこなったよ。どうだい牡丹屋の景気は？」
良一は、あたりに気を配り、
「それが全くいけねえんだよ。この夏の書き入れ時によ、突如憲兵隊に接収されちゃった。ついてねえよ」
「きょうは、遊びに来ないか」
「ああ、行く行く。なるべく早く行く。だけど馬は駄目だぜ。全頭徴発されちまった。それからテニスコートは第三国人あたりが借り切っちまって、日本人には使用不能。プールだけは開いてるようだがね。失礼、そこまで用足しなもんだから」
良一は右脚を引摺りながら忙しげに去った。
ドイツ人たちが来た。彼らは集団で歩くのが好きだ。リーダー格の婦人が胸に縫いつけた鉤十字を乳房の上で弾ませ、タクトでも振るように右手でグループに信号を送ると、グループ全体が何となく足並み揃え、ドイツ人以外は無視する、ドイツこそは世界に冠たる国、ヒューラー・ヒトラーは世界一の偉人、むろん日本人も無視する、そんな足並みで、にこりともせず、行きちがった。ドイツ人とくらべると、ほかの外人は勢いがなく、服も粗末、粗末だけでなく、不潔、皮膚の脂は抜けて、がさがさの乾いた手。けたたましいベル。またドイツの少年たちだわ。みんなナチス国旗を立てた自転車に、誇らしげに乗って、革の半ズボンから、細い脚を出して、世界に冠たるドイツの勢いで、あぶない、老婆と衝突するところだった。フランス人かスイス人か小柄な婆さん、飛びのいたからいいものの、ドイツの少年たちは怒っている、婆さんが悪いと拳を振

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com